The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	「喪失」と「獲得」をめぐる言語意識 「在日」を事例に
Author(s)	前田, 達朗
Citation	大阪大学, 2008, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/49420
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

【12】

氏　　名	前　田　達　朗（まえだ たつろう）
博士の専攻分野の名称	博　士（文　学）
学　位　記　番　号	第　２２４３５　号
学位授与年月日	平成 20 年 9 月 25 日
学位授与の要件	学位規則第４条第１項該当 文学研究科文化表現論専攻
学　位　論　文　名	**「喪失」と「獲得」をめぐる言語意識「在日」を事例に**
論文審査委員	（主査） 教　授　真田　信治 （副査） 教　授　青木　直子　　教　授　杉原　　達

論文内容の要旨

本論文の目的は、「在日」社会の中で朝鮮語維持のモチベーションとしての働きをしてきた「朝鮮語ができるのが朝鮮人だ」というイデオロギーに対する「在日」成員の個々人の言語意識について、また、それに関する「民族」とエスニック・アイデンティティとの関係について考えることにある。論文は３部構成となっている。分量は 400 字詰め原稿用紙約 640 枚である。

第１部１章では、「言語意識」といわれるものの定義について考察している。「言語意識」は本来個人のもので、集団としての言語イデオロギーを受け入れるか拒絶するかは自由であるべきなのだが、日常の生活レベルにおいては、民族の「言語」をめぐる様々な言説に影響を受けてしまうことを実例によって示している。2 章では、「在日」がその成員自身による主体的な意識に支えられるエスニシティであるべきだとする見解を述べている。3 章では、先行研究における「量的調査」の限界、問題点を指摘しつつ、本研究で採った「量的研究」と「事例研究」についての紹介をしている。

第２部 1・２章では、「在日」社会における言語イデオロギーを二つの視点から分析している。まず歴史的な観点から、そのイデオロギーの表現の場である「民族教育」を考え、その前提となる「日本」社会の少数者・少数言語にかける圧力と、その圧力に対する少数者側の反応の事例として奄美大島における事例を中心に検討している。3 章では、「在日」成員の言語意識について、民族教育の経験なしに朝鮮語の能力を獲得している個人の事例を分析している。そして 4 章では、朝鮮語ができない個人の事例を分析している。

第３部 1・２・３章は、韓国に留学した「在日」成員の事例研究である。彼らが留学を経て得たのは「在日」としての韓国社会へのまなざしと、自分が「在日」であることの確認である。留学を終えた者は自分なりに韓国とのつながり、距離を見つけているが、それはけっして送り出す民族団体が唱える「祖国」や「母国」ではなく、家族を通じての韓国とのつながりであることを明らかにしている。そして、ここにも従来型の「一世頼みの民族」の限界が見えているとする。

ところで、言語的少数者にとって、多数派に統合を求め（られ）るときにも、呑み込まれまいとするときにも「言語と民族」のつながりは強調される。力の向きはまったく逆であるにもかかわらず、「在日」のそれは両方の性質を帯びることになり、より複雑であるといえよう。たとえば、「日本語しか知らないから日本人と同じじゃないか」、「朝鮮語を知らなければ『在日』としてちゃんとやっていけないではないか」などといった言及がある。また、「日本」からは、同化への圧力がかかる一方で、同じように「朝鮮人なら朝鮮語が分かるだろう」といった無理解による圧力がかかる。言うまでもなく、「日本」に単一言語を志向する「言語イデオロギー」が存在することは、本論文のすべての議論の大前提である。それらの無理解が偏見・差別の形をとって常に「在日」を脅かしてきたのである。

論文審査の結果の要旨

本論文では二点を提起、提案している。第一点は、個人の言語意識はその個人が属する社会の言語をめぐる様々なイデオロギーや言説の影響を受けており、「言語そのもの」に対する意識ではないのではないかとする問題提起である。第二点は、今後の「在日」コミュニティにとって、従来型の「民族」からの脱却がなければ、集団としては縮小するしかないことから、その「戦術」として、「在日」をその成員自身による主体的な意識に支えられたエスニシティと捉えるべきであるとの提案である。「在日」に焦点をあてながら、移民言語のあり方について考察した本論文は、少数言語をめぐる問題、言語的少数者の問題、言語と個人をめぐる問題などに対する研究に新鮮な視点を導入するものである。

本論文でも指摘しているように、「少数言語」と「移民言語」の区別はつけておくべきである。自分の土地にいながらことばを侵される「少数言語」と、その土地を離れることによって言語的少数者になることを同一視することはそれぞれの問題を考えるにあたって不都合な点が生起するからである。その言語的少数者の例がまさに「在日」の言語問題なのである。そこでは言語的少数者を守ろうとする一方で、言語ナショナリズムが個人へと覆い被さってきていることが分かりにくくなっているのである。

本論文は、いままで見えにくかった「在日」における「言語イデオロギー」、あるいは「民族」の排他性について論じ、一世がこだわり続けていた「母国」「祖国」との関係の中で「在

日」であることを見出すことの限界について指摘し、「言語イデオロギー」は個々人の言語意識に影響を与えるが、それでもってすべてを決定づけることはできないのだ、という点を具体的に例証した点において一定の評価ができるのである。

「ことばは（付け加えるならば名前も）国のものではない。『民族』のものでもない。その人のものである。」「『ナショナル』なものから逃げる努力をするべきなのは『日本人』も『在日』も同様である。」といった論文末尾における言及は、ことばを個人のものとして取りもどすための決意表明であるが、まさに先見性を持ったものと認められるのである。以上、本論文を博士（文学）の学位にふさわしいものと認定する。